

文京ふるさと歴史館

BUNKYO MUSEUM NEWS

だより

第12号 / 平成17年4月1日発行

文京にたどる武田五一の足跡	2
文の京一葉物語を振り返って	4
新収蔵品紹介 徳田秋聲の手紙	5
展示解説を体験して	6
平成16年度のあゆみ	7
資料をご寄贈くださった方々	8
平成17年度の催し	8



横系画

文京にたどる 武田五一の足跡

たけだごいち 武田五一とは？

武田五一（1872～1938）は、明治末期から昭和初期にかけて活躍した、日本近代を代表する建築家のひとりです。住宅、公共建築、商店、社寺などの建築物のみならず、記念碑、橋梁、公園なども手がけ、さらにその活動は家具や工芸などインテリアの分野にも及び、多彩かつ膨大な作品を残



還暦頃の五一
（『武田博士之横顔』昭和7年より）

しました。代表作は日本勧業銀行本店（明治32年現、千葉トヨペット本社 国登録有形文化財）、山口県旧県庁舎（大正5年、国重要文化財）、東方文化学院京都研究所（昭和5年、現、京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター）などで、今でも彼の作品を眼にすることができます。留学経験から学んだヨーロッパの新しい様式を紹介する一方で、伝統的な日本趣味も取り入れ、独特の作風で当時の建築界に大きな影響を与えました。また教育者としての功績も高く、京都高等工芸学校（現、京都工芸繊維大学）や京都帝国大学などで教鞭をとり、優秀な人材を育成しています。また法隆寺など文化財保存事業にも貢献しており、きわめて多岐にわたる活躍をした人物として知られています。

その活動の中心はおもに関西方面でしたが、ここ文京とのゆかりも浅からぬものがあります。本郷・西片辺に、彼の足跡をたどってみましょう。

西片と五一

五一の父、武田直行（1838～1912）はもと福山藩士で、明治期以降は検事・判事となり、福山藩主であった阿部家の家令・評議員も務めた人物です。明治維新から間もない明治5年（1872）11月15日、五一は国許である広島県深津郡福山町（現、福山市）に生を受けました。5番目にやっと生まれた男子で、「五大州一」になるようお願いを込めて名づけられたといいます。その後、父の仕事の関係で神戸や岐阜などに移りますが、明治27年、帝国大学工科大学造家学科（のち東京帝国大学、現在の東京大学工学部建築学科）に入学のため上京、誠之舎に住むことになります。誠之舎は福山出身の子弟のための学生寮で、明治23年、本郷区駒込西片町（現、文京区西片2-4-3 現在日銀寮がある場所）に設立されました。西片といえば、江戸時代は福山藩阿部家の中屋敷であり、明治維新後も明治4年から現在まで阿部家が居を構えているゆかりの土地です。阿部家による貸地・貸家経営が行われた良好な住宅地には、多くの文化人・知識人・財界人が集まり、「学者町・西片」として、独特な文化を創ってきた土地柄でもあります。父の生地でもあるここ西片で、五一は学生生活をスタートさせました。

その後五一は、2年ほどで誠之舎を去り、「本郷区西片町十番地山岡方」に転居しています。【※1】「山岡」は武田家の親戚にあたり、場所はから橋（清水橋）に程近い「いー9」（現、西片1-4-15）でした。

大学時代

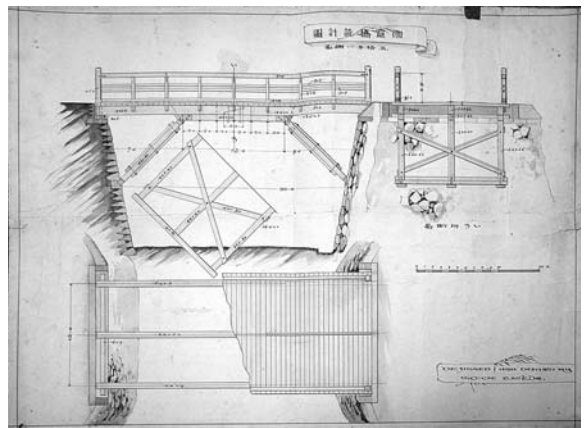
五一が入学したころの帝国大学工科大学造家学科は、前身である工部大学校のあった虎ノ門から現在の東大本郷キャンパス内に移転し、明治21年に辰野金吾（工科大学教授）設計の新校舎が完成していました。教師陣は辰野のほか、中村達太郎（教授）、石井敬吉（助教授）、木子清敏（講師）、松岡寿（講師）らがあり、同期生には片岡安、山口孝吉ら、一期下には中條精一郎が学んでいました。

五一は明治30年に首席で卒業、同大学大学院に進みます。卒業制作は「ACADEMY OF MUSIC AND CONCERT HALL」（コンサートホール）、卒業論文は「茶室建築」であり、西洋と日本の両方について研究したことは、その後の五一の進む方向を示していたかのようです。

そして明治31年結婚し、両親とともに住んだのが駒込西片町10番地ろー4（現、西片1-14-2～5辺）でした。明治32年には同大学助教授となり、明治33年に凶案学研究のため英独仏へ留学、滞欧中の明治36年京都高等工芸学校への転任を命じられ、帰国後着任し、それ以後東京に住むことはありませんでした。

阿部家との関係 —— から橋と阿部邸

ここに阿部家所蔵の「伽羅橋設計図」と記された1枚の図面があります。きりっとした墨のラインに彩色が施され、右下に「DESIGNED AND DROWN BY GOICHI TAKEDA.」とサインが入っています。伽羅橋、つまりから橋（清水橋）は、本郷（森川町）と西片の間の谷に架かる陸橋です。この図面には残念ながら制作年代は記されていませんが、明治13年頃架けられた初代の橋が老朽化し、阿部家からの依頼によって学生時代の五一が設計したものと推定されています。これにはもう少し調査が必要ですが、五一と西片、阿部家との関係を物語る興味深い資料です。



「伽羅橋設計図」阿部正道氏所蔵（撮影：田代 洋志）

さらに後の話になりますが、昭和2年に竣工した阿部家の洋館は五一が設計しています【※2】。鉄筋コンクリート造2階建て部分と、木造平屋建て部分で構成され、延べ280坪もの邸宅でした。その竣工・移転に先立つ同年9月、五



阿部家洋館（『住宅建築図集 皇紀二五九五』より）

一本人が建物の実況見分に訪れ、伯爵・阿部正直が対応したことが、「阿部家日記」に記されているそうです。この建物は戦後、国土開発（現コクド）に売却され、「グリーンホテル」として使われていましたが、まもなく庭とともに解体されたということで、残念ながら現存していません。

きゅうどうかいかん 求道会館と求道学舎

もうひとつ、五一と文京とのかかわりで、今の私たちが最もよくその実像を眼にすることができるのが、五一が設計し、現在も残っている求道会館と求道学舎です。浄土真宗の僧侶で、近代の宗教改革者であった近角常観（1870～1941）が、学生と起居を共にしながら、自らの生きた宗教体験を語り継ぐ場として、明治35年、本郷区森川町（現、本郷6-20-5）に創設したのが求道学舎です。そして大正4年（1915）、広く公衆に信仰を説くため求道会館を敷地内に建設しました。ともに欧米留学の経験を持つ常観と五一は、明治36年に設計に着手してから、12年もの歳月をかけて構想を練り、西洋の教会建築の空間構成を持ちながら、伝統的な社寺建築のモチーフも混在させた建物を完成させました。主要な躯体はレンガ造、小屋組はハンマービーム形式の木造トラスという西洋建築的構造である一方、内部正面に配置された総檜造りの六角堂や「卍」をデザインした高欄などは和風のモチーフが採用されています。現在東京都有形文化財に指定され、平成14年に復元修復工事が完了、月1回の公開のほか、コンサートや講演会などさまざまな用途で活用されています。



求道会館 平成17年撮影

また隣接する求道学舎は、創設当初の木造建築が老朽化し、五一の設計によって大正14年に建て替えられたものです。鉄筋コンクリート造3階建てで、平成11年まで学生寮として使用されてきましたが、いったん閉鎖され、現在、躯体を活かしたコーポラティブ住宅として、保存再生計画が進んでいます。

東京に眠る五一

ある冬の晴れた日、染井の勝林寺（豊島区駒込7丁目）に武田家の墓所を訪ねました。

勝林寺は臨済宗妙心寺派の寺院で、もと駒込蓬萊町（文京区向丘2丁目）にありましたが、本郷通りの拡幅により、明治40年に墓地、昭和15年には寺自体が現在地に移転しました。五一の設計になるこの墓碑は、表面には武田菱の紋と「武田家累代之墓」の文字が刻まれ、天頂部は尖り、周囲の墓に比べるとひととき大きく高く、凛として立つ姿は異彩を放っていました。裏面の銘によると「大正二年貳月建□」【※3】とあり、その前年2月に父が没しているの、それを機に建立したものかとも考えられます。



武田家墓碑
平成17年撮影（撮影：田代 洋志）

五一は昭和13年（1938）2月1日、保存工事を担当していた法隆寺で倒れ、5日急逝しました。享年66歳でした。五一の遺骨も、自身が設計したこの墓に埋葬され、父や親族とともに眠っています。

文京ふるさと歴史館では、平成17年度は、「建築家・武田五一」をテーマに、文京・東京との関わりに注目した特別展を開催する予定です。

（川口明代）

- ※1 『旧福山藩学生会雑誌』第15号（明治29年5月23日 同会発行）の記事による。前号（同年2月18日発行）では、まだ誠之舎の住所となっている。
- ※2 『武田博士作品集』（武田博士還暦記念事業会編・発行 昭和8年）に掲載されたリストでは武田五一の設計となっているが、施工者である清水組編の『住宅建築図集 皇紀二五九五』（昭和10年、土木建築資料新聞社発行）によると「A伯爵邸 設計 清水組」とある。
- ※3 最後の1文字は剥落により判読不能。「之」か？

《参考文献》

- 『武田五一 人と作品』
博物館明治村編 名古屋鉄道(株)発行 昭和62年
- 『東京都指定有形文化財 求道会館修理工事報告書』
(株)文化財工学研究所編 同修理委員会発行 平成14年
- 『武田五一・田辺淳吉・藤井厚二 日本を意匠した近代建築家たち』
ふくやま美術館編・発行 平成16年
- 『西片町会創立50周年記念誌 西片町の阿部家とその時代 西片町の郷土史』
地縁法人西片町会編・発行 平成16年

文の京一葉物語を振り返って - 本郷のまちの魅力を全国に発信 -

はじめに

新五千円札が発行されてから既に数ヶ月が経過し、本郷・菊坂界隈も落ち着きを取り戻したかのようにみえます。それでも、友の会の文京まち案内では一葉コースが今でも一番の人気ですから、まだまだ新札効果が続いているのかもしれない。文の京一葉物語事業にはふるさと歴史館も事務局として関わり、また同時に主催事業として特別展や講演会を開催するなど、一葉関係事業の先導役を果たして来ました。この事業を振り返り、地域博物館としての今後のあり方を含めて簡略に総括をしてみたいと思います。

実行委員会の結成

さて、新紙幣の発行が発表されたのが何時だったのか今となっては思い出すのも大変ですが、樋口一葉が五千円札の新しい顔になるとの財務大臣発表は3年前の夏頃だったと思います。発表当時の新札発行予定は16年7月頃とされていたように思います。樋口一葉は文京区と台東区がゆかりの地といえますが、早速、台東区の一葉記念館は来館者が急が増えるなど、一葉に対する関心が高まったようです。一般には樋口一葉ゆかりの地という和一葉記念館のある台東区の方が有名ようです。「文京区の方がゆかりが深いのですよ」といってもそう簡単には多くの人の意識は変わらないものです。そこで、文京の樋口一葉を広め、一葉文学を顕彰するため、文の京一葉物語実行委員会を結成して、区と地域の諸団体とが連携・協同して、様々な事業を展開することになりました。

文京区の〈売り〉は

文京区としては、一葉に関するまとまった資料がありませんから、常設的に一葉を展示するというような対応は不可能なことです。一方、史跡的なものは、「腰衣の観音様」のある法真寺、貧苦の一葉がかよった旧伊勢屋質店（蔵は明治20年移築）、明治の面影を宿す菊坂旧居跡の路地と井戸、また、終焉の地に建てられている記念碑や萩の舎跡、こんにゃく閻魔など、本郷界隈を中心に一葉関連の文化遺産としては見るべきものが数多くあります。さらに、本郷界隈には、石川啄木、宮沢賢治の旧居跡や菊富士ホテル跡など文学系の史跡が多くあり、また、所々にのこる細い路地の家並みや古い建造物が醸す風景も、貴重な文化遺産といえます。つまり本郷界隈というまちそのものが〈売り〉ということになります。したがって、文の京一葉物語の成否は、自分のまちを愛する方々の主体的な参画がまずもって重要となり、地域のことを一番良く知っている区民（とりわけ本郷界隈の住人）や団体の発想による事業の展開が求められていたといえます。

事業の成果

今回の事業のように2年度にわたり多数の事業を展開して

いくということはお前例がなかったのではないかと思います。また、紙幣の発行が16年7月頃から11月1日に変更になったことで、結果的には一葉忌の時期にうまく重なり、さらに特別展のテーマも文学系に変更した結果、発行時期のイベントはさらに充実したものになりました。平成15年10月24日の開会式と特別展「樋口一葉その生涯」の内覧会に始まり、昨年11月23日の文京一葉忌に至る間、多くの事業が実施され、トータルで見て相当な成果が挙げられたものとみられます。最も重視したいのは、住民の力・地域の力が成功に導いた事業が多数あることです。例えば、昨年と一昨年の旧伊勢屋質店の公開では、所有者との交渉から当日の公開日の見学者への対応に至るまで、全て自主的に運営され、押しかける見学者の波に対しても見事に対応していました。「一葉さんへの手紙」の募集・展示も大変面白い発想で感心したのですが、その実行に至るまでパワフルな行動力で、実に100通以上の素晴らしい作品の応募がありました。また、2年間にわたり菊坂の名前の由来となった菊作りを行い、菊坂周辺を菊で飾った地元団体の息長い活動力に敬服しました。以上具体的な例を三つほど挙げたのですが、メインとして位置づけた一葉忌にしても、当日の運営は、長年自主的にこのイベントを仕切ってきた文京一葉会なしには語れません。まさに本郷の町に住む人々の力の結集によって、複合的・相乗的な事業効果が挙げられたと考えられます。

本郷“エコミュージアム”に向けて

本郷の〈売り〉はまちそのものです。最近マスコミにも度々取り上げられるようになっていますが、何度でも訪れたい魅力あるまちとして存続していくため、何らかの仕掛けを考えてもいいのではないかと思います。例えば、エコミュージアムというような構想も考えられます。つまり地域の伝統文化や文化遺産などがそのまま展示物となり、まちを散策して歩くことが、博物館を“見学する”こととなりますから、地域の住民の方は語り部であると同時に学芸員的な役割も務めることとなります。当然このような構想には地域の人々の主体的な参画が最も重要なのは言うまでもありません。しかし、私はこの構想の実現はそう難しいと思います。と言いますのも、一葉物語事業の一時期は、まさにエコミュージアムを短期的にせよ実現していたと考えられます。ですから持続的なものに変換するような



旧伊勢屋質居の公開

仕組みを作り上げていけばいいのですし、本郷の人々の力があれば十分可能だと思います。地域博物館としての我が文京ふるさと歴史館もまたこの地域の住人でもあります。本郷という環境の中で育まれてきた博物館として、共に汗をかいていきたいと思っています。

(宮前一雄)

新収蔵品紹介 徳田秋聲の手紙

徳田秋聲—生まれたる自然派—

徳田秋聲(1871～1943)は、明治・大正・昭和と活躍し、膨大な数にのぼる作品を発表した文学者です。城下町金沢に生まれた秋聲ですが、文学を志し上京、紆余曲折を経て尾崎紅葉の門に入り本格的な文学活動を始めます。文京には長く暮らし、旧本郷区森川町1番地124(現、本郷6丁目)の自宅が終焉の地となりました。現在、旧居は東京都の史跡に指定されています。

作品に『新世帯』、『足跡』、『儼』、『あらくれ』、『仮装人物』、ほか多数があります。自らの身の回りに実際に起きた出来事や家族・友人・知人らを題材にした作品も多く、生田長江(評論家・翻訳家)が「生れながらの自然派(Born naturalist)」(明治45年『最近の小説家』)と評したように、秋聲は自然主義文学者の代表的存在とされています。

秋聲最後の作品『縮図』

その秋聲、生涯最後の作品が『縮図』です。『縮図』は、昭和16年(1941)6月28日より『都新聞』(『東京新聞』の前身)に連載されます。白山と思われる花柳界を舞台に、置屋を営む一女性、銀子とその半生を綴るこの作品は、9月15日の80回目を最後に中絶します。この間の事情は、単行本『縮図』(昭和16年)あとがき(秋聲の長男徳田一穂執筆)にやや詳しく、時節柄、軍当局による作品内容への干渉があったこと、それに対し秋聲が「妥協すれば作品は腑ぬけになる」として筆を絶ってしまったこと、その後「『縮図』だけでも完成させておきたい」と語っていたことなどが記されています。

未完にもかかわらず『縮図』は、「秋聲文学の頂点」、「秋聲文学の辿りつくところを示した素晴らしい傑作」(広津和郎 昭和16年『徳田秋聲論』)、「近代日本最高の小説であることは疑いない」(川端康成 昭和21年「徳田秋聲『縮図』」)など、たいへん高い評価を得ます。とくにヤマ場を設定するわけでもなく、無名の一女性の生活・半生を淡々と、かつしつとりと描いた作品です。そうした描写ゆえでしょうか、未完であることが作品評価を損なうことのない、稀有な作品となっています。

『縮図』主人公：銀子のモデル

銀子にはモデルとされている人物がいます。旧小石川区指ヶ谷にて芸者の置屋・富田屋を経営した小林政子です。政子の手記(昭和25年「縮図のモデル銀子」『読売評論』)からは、政子の「折々」の「おしゃべり」をもとに『縮図』が構想され、書かれたこと、また秋聲は政子の置屋運営を、政子は秋聲の執筆活動を、互いに支え合っていたことなどをうかがい知ることができます。

新収蔵品の紹介

その小林政子の遺品、写真や秋聲が政子に宛てた手紙、秋聲筆の短冊・色紙などが、このたびご遺族より文京ふるさと歴史館に寄贈されました。その一部をご紹介します。

今回寄贈された「写真1」は、「銀座を歩く徳田秋聲と小林政子」と裏書きされたもので、銀座の柳を背景に歩く秋聲と政子が写



【写真1】銀座を歩く徳田秋聲と小林政子

っています。『縮図』冒頭は、銀子と均平(その経歴に違いはあるものの秋聲自身がモデルとされる)が銀座資生堂で食事をするシーンですが、この写真はまさに『縮図』さながらの世界を写し出す、たいへん興味深い一枚といえるでしょう。

【写真2】は昭和8年(1933)、秋聲より政子宛の手紙です。書き出しに「君が戦線へ立つ日も近づいて来た」とあるのは、政子が置屋営業を始める状況を語ったものでしょうか。続いて「悦ばしいやうで何か悲しいやうな気がします」と秋聲の複雑な心境が語られます。手紙はさらに、本郷座で見た映画「雨」(ジョン・クロフォード主演)の感想が続き(政子も映画鑑賞が趣味でした)、「君がゐないと仕事の張合もない」という告白となります。秋聲の人間性を示すかのような、実に正直な、飾りのない手紙という印象を受けます。

その他の手紙も当時の秋聲の状況を伝える貴重なものです。今回寄贈いただいた資料の一部や、秋聲ご遺族よりお借りした『縮図』原稿などを、歴史館では平成16年度特別展「愛の手紙—文京ゆかりの文学者たち—」(会期10月30日～12月7日)にて展示、「秋聲の作品を改めて読みたくなった」など、好評をいただきました。

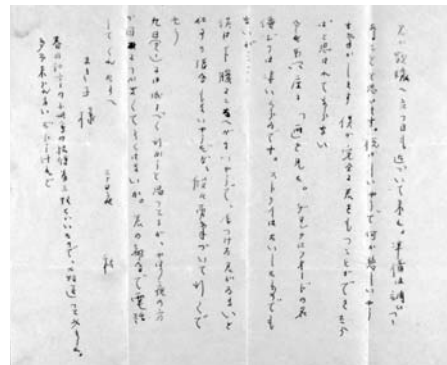
文京には多くのゆかりの文学者がいますが、文京に長く暮らし、文京を舞台とした多くの作品を発表し、文京で最期を迎え、現在も旧居の残る徳田秋聲は、なかでも特別な存在の一人といえるのではないのでしょうか。

(東條幸太郎)

《参考文献》

『徳田秋聲』松本徹、笠間書院、1988年

『徳田秋聲ノート』野口富士男、中央大学出版部、1972年



【写真2】秋聲より小林政子宛書簡

展示解説を体験して

文京ふるさと歴史館では、特別展や学習企画展に展示案内員が配置されています。展示案内員は来館されたお客様に、展示の内容を、よりよく理解していただけるよう、展示案内を中心に、展示に関する業務を行っています。お客様と直接お話することになりますので、各自責任感を持って務めて参りました。

平成16年2月14日（土）～3月21日（日）に行われた学習企画展「本草から植物学へ」岩崎灌園から牧野富太郎まで」では、パソコンで白山にある小石川植物園内の様々な植物を見ることができる、参加型の映像展示が取り入れられていました。ご年配のお客様の中には、パソコンの操作に不慣れな方も多くいらっしゃいましたが、簡単に操作を説明すると、すぐにご自分でパソコンを使いこなし、さらには、パソコン内のデータにはなかった、園内の詳細な植物の配置や名称等を案内員に教えてくださる方もいらっしゃいました。

このように、その展示テーマに大変詳しい知識をお持ちのお客様も多く見学にいらっしゃいます。展示案内員も事前に担当職員によるレクチャーを受け、また、自分たちで展示に関する参考文献を読むなど、お客様の質問に備えますが、逆に教えていただく事もしばしばでした。

展示に関する事以外にも、様々なご質問が寄せられます。区外から来られたお客様に、おいしいランチを食べられるレストランを尋ねられた事もありました。この種のご質問は、どちらかという得意分野でしたので、お客様の人数や好みにそっていくつかのお店をお勧めいたしました。

また、この展示会では、愛好家の方から提供していただいた貴重な万年青への水遣りも案内員の仕事でした。大きなバケツに水をため、万年青を鉢ごと沈めます。普通の鉢植えの植物とはまったく違う水の遣り方でした。この水遣りを通して、万年青が大変デリケートな植物であり、また昔から大勢の人々を魅了してきた植物であることを実感でき、展示案内をする上で大変参考になりました。

平成16年10月23日（土）から、12月5日（日）まで行われた、特別展「愛の手紙—文京ゆかりの文学者たち—」では、かつて文京に居住していた作家たちの原稿や、友人らに宛てた書簡などが展示されました。著名な作家たちのコーナーでなじみのある地名を目にして、歓声をあげる地元の子どもたちもいました。その作家や、作品に対して親近感が増したのではないかと思います。



今回の特別展では、ご遺族のご協力により、初公開となる資料も何点が展示され、それぞれ注目されていました。

詩人、窪田空穂愛用の集音器は、いわゆる補聴器の役割をしていたものと思われませんが、その大きさとレンコンのようなユニークな形から、多くの方が興味を持たれ、使用方法等についてのご質問を受けました。おそらく、常に手で支えて、聞きたい音のする方に向けていなくてはならなかったであろうと説明したところ、補聴器一つとっても今とはだいぶ違う当時の生活に、思いをはせておいででした。

『縮図』や『新所帯』を執筆した作家、徳田秋聲が恋人の政子に宛てた手紙も展示され、お客様の視線を集めていました。特に、女性のお客様が熱心にご覧になっていたようです。独特の筆跡から、使用された筆記用具についてのご質問も受けました。あるお客様によれば、手紙に関してはガラスペンが使用されているのではないかとのことでした。また、夏目漱石に学校で教わった方や、お母様が与謝野晶子の次女と同窓生であった方など、ご自身や身近な方が、作家と関わりのあったというお客様も、数名来館されていらっしゃいました。皆様、様々な交流譚をお話くださいました。

さらに、文学というテーマのせいか、作家や作品にご自身を重ね、半世紀を越えるご自身の人生を切々と、案内員に語ってくださったお客様もいらっしゃいました。思いがけず、個々人の近現代史が浮き彫りになり、そういった点でも、大変興味深い展示であったのではないかと思います。展示に関する知識をこちらから一方的にお伝えするだけでなく、展示物や展示テーマに対するお客様の思いや、要望を聞かせていただき、お互いに対話することで、お客様も、また案内員も展示をより深く理解してゆけたのではないかと、展示案内員を経験して感じました。

これからも、お客様により展示をお楽しみいただけるよう、案内員一同努力してまいりますので、展示室でお見かけの際はどうぞお気軽に声をおかけください。

（高塚明恵）

平成16年度のあゆみ

区民大学・文京の歴史講座

「植物へのまなざし」(全3回)

- ◆5月23日(日)「牧野標本館の200年前の標本—シーボルトコレクション—」
／加藤信重氏(獨協大学教授) 参加者……95人
- ◆5月30日(日)「シーボルトの集めた種子・果実—薬学者の目から見た標本—」
／和田浩志氏(東京理科大学助手) 参加者……80人
- ◆6月6日(日)「日本の本草学略史—物産学の観点から—」
／平野満氏(明治大学教授) 参加者……74人



歴史講座

小・中学生のための歴史教室

「江戸の和綴じ本をつくろう」

- ◆第1回 8月4日(水) 参加者……20人
- ◆第2回 8月6日(金) 参加者……19人



小・中学生のための歴史教室

文の京—葉物語記念特別展

- ◆第1会場 文京ふるさと歴史館
「愛の手紙—文京ゆかりの文学者たち—」
10月23日(土)~12月5日(日)(延べ38日間)
入館者数(講演会、朗読講座参加者含む)……6,341人
- ◆第2会場 シビックセンター1階アートサロン
「文の京—葉物語—葉物語展」
11月6日(土)~11月23日(火)(延べ18日間) 入場者数……7,424人
- ◆記念講演会 会場:男女平等センター
11月21日(日)「徳田秋聲—本郷と白山—」
／松本徹氏(文芸評論家・元武蔵野大学教授) 参加者……92人
11月28日(日)「漱石と本郷界限—『三四郎』と『こゝろ』の間—」
／小森陽一氏(東京大学教授) 参加者……130人
- ◆関連事業(文の京—葉物語)
 - ・一葉五千元基金募集
募集期間7月15日(金)~11月30日(火)
 - ・一葉キャラクター募集
323点応募 最優秀賞 佐藤圭子氏
 - ・熊澤南水ひとり語り「十三夜の夕べ」
講演「建築家 武田五一と求道会館」 近角真一氏(求道会代表役員)
ひとり語り「わかれ道」「十三夜」 熊澤南水氏
10月29日(金) 求道会館 参加者……133人
 - ・文京区・塩山市事業協定締結式・文の京—葉物語推進大使委嘱式
11月6日(土) スカイ・ホール 参加者……文京区約60人・塩山市約50人
 - ・文京—葉忌
法要、講演、朗読、旧伊勢屋質店公開、史跡めぐり
11月23日(日) 法真寺



特別展(第1会場)



特別展(第2会場)



一葉キャラクター募集 最優秀賞